

旅人と憶良

——主として漢籍引用より見たる——

二十五回生 四十号 堀部 孝子

目次

まえがき

本論

第一章 作品に引用された漢籍

(略)

第一節 漢籍引用一覽

第二節 説明、考察

第二章 漢籍引用の態度

第一節 時代的背景

第二節 出自・経歴

第三節 作品に見られる漢籍引用の態度

結び

まえがき

万葉集の中に於いて、太宰府の歌壇、所謂都府文学の形成者の中心人物は、いうまでもなく太宰帥大伴旅人と筑前国守山上憶良である。憶良の歌にあるように、太宰府は奈良の都から遠く離れた「天さかる鄙」であった。しかし大陸の改新によつて始められた律令体制の進行は、即ち大陸

文化の摂取であり、この「天さかる鄙」太宰府は大陸文化輸入の重要な門戸であつた。

神龜年間に憶良は筑前国守として、また旅人は太宰帥に就任することによつて、この太宰府の地で二人の邂逅があつた。この出逢いが彼らにとつてどのような意味を持つていたかはしばらく置くとしても、両者の万葉集に於ける作品の殆どがこの太宰府時代のものであり、後の研究家の多くが両者を並び評していることを考えるならば、ここに重要な意義が見い出せるであらう。

こうした旅人と憶良とを対比させた論は、高木市之助氏の「憶良と旅人」、土屋文明氏の「旅人・憶良」など数多くあるが、両者は共に太宰府歌壇の中心人物であり、漢文学の造詣が深く、又作品の内容に思想的な傾向を含んでいることなどがその共通点として挙げられる。また一方、その出自・生涯・性格及び作風の違いが言われている。

そこで私は旅人と憶良とが漢文学や漢土思想を身につけた新知識人であり、その源である中国に門戸を開いた太宰府の地で出逢つたことにヒントを得、彼らの作品に引用さ

れた漢籍を辿ることによつて、両者を対比させることがで

によつて、我が国の律令国家の一応の完成を見たのであつた。

れた漢籍を辿ることによって、両者を対比させることができるのではないだろうかと考えた。

初めに万葉集に収められた旅人と憶良との作品の中、漢籍から引かれたという語句を辿ってみた。そして、それらの漢籍の中何らかの特色が見られるものについて、両者との関連について私なりに考察を進めていきたいと思う。以上を第一章とする。

次に、第二章として旅人と憶良との漢籍引用の態度を見ていくために、彼らが漢文学を享受した時代的背景と、環境と、作品に見られる漢籍引用の態度とから考察していきたいと思う。

第一章 作品に引用された漢籍 (略)

第二章 漢籍引用の態度

第一節 時代的背景

旅人と憶良との全貌を見る場合、続日本紀・万葉集・懷風藻だけが今日資料として伝わるのであるが、彼らに影響を与えた漢文学との関連を捉えるためには、まず彼らととりまく周囲に目を向けねばならない。

大陸の影響を抜きにして日本の歴史を語ることは到底できないが、旅人と憶良とが生を享けた近江朝から奈良朝にかけての時代も、決してその例外ではなかった。

政治的には、唐の律令体制に基づく中央集権国家体制確立への努力が続けられ、大宝元年(701)の大宝律令の実施

によって、我が国の律令国家の一応の完成を見たのであった。しかし改新の理想とは裏腹に、皇権と律令支配貴族層との均衡は次第に崩れ、神亀元年(724)を境として皇権政治は実質上終わりを遂げ、その外戚の地位を得た藤原氏が権勢の中心へと移っていった。この様な政権をめぐる紛争の中で、名門大伴家の統領である旅人の心にも、旧豪族の辿るべき衰運が目に見えていたのであろうか。

この様な政治機構の著しい発展に伴って文化面でもまた、貴族達は清新の気をもって大陸の文化を積極的に輸入し、さらに吸収・消化に努めた。特に旅人と憶良との盛年時代とも言うべき、藤原京時代から奈良朝にかけては漢詩漢文の創作が興隆した時代であったが、そこに盛られた中国思想も直ちに取り入れられたのである。社会組織や政治機構がすべて大陸の文化、殊に儒教思想に基づく政治思想を手本にしたのは明白な事実である。養老二年(718)に制定された養老律令がその性格をはつきり顕わしており、戸令には「敦諭五教勤農功」とあり、憶良の「令反惑情歌序」に「八所以指示三綱、更開五教遺之以歌、令反其惑、とある様に、国守の職務としても五教を治下の民に教示した事などによって明らかなである。さらに学令に見える様に、大学の教科書は総て、儒教聖典で占められているが、如何に儒教がその中核を成していたかは、例えば「兼習」の課目中、孝経・論語はとりながら、唐制に反して老子を退けたところにも窺うことができるのである。

これら政治・文教政策に支えられた律令国家の繁栄は実

に目を見張るものがあつた。けれどもその裏にはすでに諸種の矛盾があらわれており、その社会的矛盾の中で老荘神仙思想の流行があつた。

飲むべくあるらし

（巻三 338）

これは旅人の「讀酒歌十三首」の中の一首であるが、ここにも一切を拒否して「この世」を樂しく生きようとする、徹底した享樂主義の一面が見られる。

以上は支配者階級、つまりひと握りの貴族を中心とした世界であるが、一方、残り大部分を占める一般民衆の姿はどのようなものであつたのだろうか。これについては竹内理三氏の「万葉時代の庶民生活」に詳しいが、とにかく律令国家の繁栄の裏にある矛盾に苦しんでいたことは明らかである。当時の農民の義務は租税・労役、その上兵役まであり、彼らには極めて重い負担であつた。憶良に、

世の中を憂しと恥しと思へども

飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

（巻五・893）

と言わせた農民の現実、誠に惨憺たるものがあつたであらう。

このように、新興貴族と衰退の途を辿る旧豪族、儒教思想と老荘思想、榮華を極める貴族官吏とその犠牲となる農民等、多くの対立を含んだ時代に、旅人と憶良とは生きていたのである。

第二節 出自・経歴

一、出自

旅人は「統紀」に、

難波朝、右大臣大紫長徳之孫、大納言贈従二位安麻呂之

第一子也

と記されているように、大伴安麻呂の嫡子として生まれた。大伴家は雄略天皇の頃より続く武門の名家であり、旅人はその嫡子という恵まれた境遇にあつた。さらに加うるに、大伴坂上郎女、大伴家持等の如き歌人を輩出した文学的素質も伝わるような家柄であつたことも重視せねばならないだらう。

一方、憶良については「新撰姓氏録」に、粟田朝臣、大春日朝臣、同祖、天足彦国忍人命之後世、日本紀合、山上朝臣同祖、

とある。「臣」という姓は第六等であり、当時の社会では有力ではなかつた。そして憶良以前に史上に名を留めたものがないという無名・無力の家に生まれたのが憶良であつた。

旅人と憶良とが生まれるとともに置かれた環境はこのように異なつていたが、その違いが、彼らの少年期から青年期に多大に影響したのである。事は想像に難くない。

旅人らの少年時代は、大陸文化との接触によつて貴族社会に学問が盛んに興つた時代であつたことは前にも述べたが、天智天皇の時代に大学・国学に先がけて学校が設けら

れ、天武・持統天皇の時代には大学寮の組織も整っていたことが知られている。旅人もまた名門貴族の子弟として、大学寮に入学してその教育を受容し、学問に励んだことである。他方、大学寮入学の資格もなかったであろう憶良が、後に遣唐少録に抜擢せられたことを考えるならば、天

会に学問が盛んに興った時代であったことは前にも述べたが、天智天皇の時代に大学・国学に先がけて学校が設けられ、分はもちろん、その努力は並み大抵ではなかったであろう。

二、経歴

旅人・憶良の経歴について、簡単にまとめてみる。

年代	年令	旅人	年令	憶良
齊明六 660 (年)			0	誕生
天智三 664	0	誕生		
大宝元 701			42	遣唐少録に任命
〃二 702			43	渡唐
慶雲元 704			45	帰朝
和銅三 710	46	左將軍に任命		
〃七 714			55	従五位下となる
靈龜元 715	51	正月・従四位上となる 五月・中務卿となる		
〃二 716				
養老二 718	54	三月・中納言となる	57	四月・伯耆守に任官

神 龜 元	〃 五	〃 四	〃 三	〃 三	〃 五	天 平 二	〃 三	〃 五
724	721	720	719	726	728	730	731	733
60	57	56	55	64	66	67	/	
正三位となる	三月・征隼人持節大将となり筑紫へ下向 正月・従三位となる	三月・正四位下となる 九月・山背国撰官に任官		この頃太宰卿として赴任	大納言に任ぜられ帰京	正月・従二位となる 七月・没		
62	67						72	74
東宮に待す	この頃筑前国守として赴任						この頃までに帰京	没?

これら記録にあるものは、すべて政事に関する事柄に限られ、しかも旅人は四十六歳、憶良は四十二歳以降という人生の後半のみしか知る事はできないのであるが、これを手掛りに、旅人・憶良と漢文学との繋がりについて探っていきたい。

旅人が名門貴族の嫡子として、その恩恵を一身に受けて過ごした幸福な日々は長くは続かず、社会の中での大伴家の位置は次第に下降線を辿ることとなった。

その旅人にとって、神龜年間に任官された太宰帥がいかにか栄職であったとしても、老齢の身をもつて「天さかる鄙」の地へ赴くことは、中央政界からの脱落という意味においても不満があったことだろう。その他、妻の死なども重なって多少性格的な弱さをもつ旅人の憂^{註2)}いは、当時盛んであった老荘の思想とも関係して、彼の歌を超現実的な傾向へ向かわせたのではないだろうか。

憶良が正史に名を記すのは大宝元年に遣唐少録になった

の位置は次第に下降線を辿ることとなった。

のに始まる。憶良の在唐期間は二年間であつたが、それまで手にした僅かばかりの書籍からしか学ぶことのできなかつた唐の高度な文化に直にふれたのである。憶良の唐土産の一つとして吉永登氏は「遊仙窟」を持ち帰つたことを、清水克彦氏は述志文学の撰取をあげておられる。

憶良はその生涯のうち二度の国守の経験をした。中西氏は「政治と社会との矛盾が激突する場所に立つたのが地方官^(註3)」といわれた。憶良も一方では「令反感情歌」によつて国守としての立場を守りながらも、他方では重い負担に苦しみ、冷酷な里長に脅えつつ暮らす農民達の姿を「貧窮問答歌」に描いている。憶良が万葉時代にあつて、特異な歌風をもつたのは、渡唐及び国守の経験が大きく影響していたことは疑えまい。

第三節 作品に見られる漢籍引用の態度

旅人と憶良とが典拠とした漢籍は、文選や經書等の「必讀書」から、遊仙窟等の所謂「俗書」に至るまで数多くあつたのだが、ここでは、彼らがそれらの漢籍をどのような態度で、或はどのような意図で利用したのかを探つてみたい。

前述したように、旅人らの時代は政治機構はもとより、文学の世界に於いても漢文学の影響を抜きにしては考えられなかつた。当時の人々は自己の学んだ漢籍の訓詁・語句・文飾・素材・形式なども取り入れて、さらには思想内容まで盛り込もうとしている。

憶良が正史に名を記すのは大宝元年に遣唐少録になつた

憶良の作品に「令反感情歌并序」(巻五)がある。この序では、墨子・文選・淮南子・史記・抱朴子・白虎通・左伝というように、七種の漢籍より語句を引いて、八亡命山沢之民^(註4)を諫めようとする筑前国守としての憶良を見ることができる。この場合「名だたる漢籍」から多くの語句を引用しており、一つには憶良が漢文学の知識を示そうとしていたとも考えられる。憶良の漢籍引用に於けるこのような傾向は、長編の漢文「沈痾自哀文」にもみられる。この作品について小島氏は、

漢文引用態度は、前述の如く漢籍の文を殆んどそのまま用ゐ、或は要約し、諸書の孫引を行ふなど、述作語句の潤色に力をそそぎ、何れも自哀文の骨となり肉となつてゐる。特に抱朴子の借用利用は著しく、その論旨の半ばは抱朴子内篇の諸篇を切断し、接合し、整理し、
老い先の短い彼は、なほも心競つて自己の「文學ごろ」を沸き立たせたのである。(「上代日本文學と中国文學」と述べておられる。このように憶良の漢籍引用の態度としては、自分の感情を作品に表現しようとする場合、更に漢籍から語句借用して彩りを加えていることが窺える。

それに対して、旅人に憶良のような傾向がなかつたとは言えない。がさらに大きな特徴として素材・構成について漢籍から暗示を受けている作品が見られる。それは巻五に収められた「大伴淡等謹状」と「遊於松浦河」とである。

「淡等謹状」と「琴賦」との関係について古沢先生は、
先ず桐の生地・生立ち・環境が述べられ、次いでその希望・

念願を述べて現在の境遇を語るに至る構成内容が類似しており、その後の表現に於いても、一致はしていないが、趣意を取り有効に活用していることを指摘しておられる。一面の琴を贈呈するという実務的な行為（もし、旅人が帰京を請願するという目的をその琴に託していたのなら尙の事）を、「琴賦」の構成内容に暗示を受け、さらに琴が夢に娘と化して現われるという神仙譚的な趣きを加えて、一篇の物語的なものとして創造したことは、旅人の風流を示すものといえよう。

また「遊於松浦河序」は文中にも「若疑神仙者乎」という語句があるように、神仙的な雰囲気が漂った作品である。この序が「遊仙窟」に拠っているということは契沖の昔より説かれている。今、それを改めて述べてみると、「遊仙窟」からの典語句の多いことがあげられるが、これは第一章の関連表からも明らかである。また筋書が「遊仙窟」のそれを辿っていることである。この序の成立状況については、松浦河の描写が殆どないことから机上の作^(註5)とも見ることができ、或は何かの折に松浦河を訪れ、そこを仙境にたとえたと考えることもできる。いずれにせよここに描かれている事柄は事実を写したのではなく、「遊仙窟」に模したフィクションである。「淡等謹状」にしろ「遊於松浦河」にしろ、それがフィクションであるという事は、自然憶良の「沈痾自哀文」とは違った漢籍引用態度を示す。つまり憶良の「沈痾自哀文」の場合、老身に重い病気の重なった際、自己の嘆きを何とかして述べたい、書き留めたい

と願ったのであろうし、それを満足させるために漢籍も利用されたのであろう。しかし旅人には、そのように切迫した感情はなく、漢籍にヒントを得て創造するという余裕がみられ、これは旅人特有の文雅に遊ぶ傾向といえる。

憶良に虚構の作品がなかったとは言えない。憶良の代表的な作品「貧窮問答歌」（巻五 892、893）の貧者と極貧者がそれにあたる。しかしこの虚構は国守としての憶良が、実際にした農民の窮状を代弁するための文学的手法として取り入れたものであり、結局憶良自身の嘆き人かくばかり術なきものか、世間の道 \vee を述べている。そこにはやはり旅人の文雅の引用とは自ら相違がある。

憶良が旅人と同様に漢籍の知識、文芸の才をもつていながら、その受け取り方の違いは「遊仙窟」の受け取り方も如実に顕われている。

「遊仙窟」については小島氏が詳細に検討しておられ、その性格については、

(一) 神仙的志怪的な六朝小説や伝奇的な唐代小説に類似する内容をもつ。

(二) 俗諺を始めとして啓蒙的模範文的要素を持つ。（「漢籍の享受」国語国文四十二年）

という二点をあげておられる。勿論、旅人が「遊於松浦河」に採用した「遊仙窟」は(一)の面を強調しており、憶良が「沈痾自哀文」で「九泉下人、一錢不值 \vee と取り入れたのは、(二)の要素を用いているといえるだろう。

この様にみていくと、旅人と憶良とは第一章でみたよう

つた際、自己の嘆きを何とかして述べたい、書き留めたいに数多くの漢籍を利用しては、その態度に於いて、一方の旅人は漢籍の利用によって虚構の作品を創造するといふ余裕を見せ、他方の憶良は反対に、民衆を諷刺する、或は自己の切実なる感情を表現する手助けとして漢籍を利用するという、現実的な面を見せるのである。中国のあらゆるものを受容した時代に同じく生きた旅人と憶良との漢籍引用態度のこうした違いは、その出自や経歴に大きく影響されたものと見ることができそうである。

むすび

以上、旅人と憶良とについてその漢籍引用の面から考察を進めてきた。

第一章に於いては、旅人・憶良と漢籍との関係を知るために、漢籍からの引用語句をまとめてみたのであるが、その結果、両者が如何にその語句を漢籍から取り入れているかを確認することができた。さらに引用語句数の多少だけですべて明らかになるとは思わないが、「文選」「抱朴子」「遊仙窟」の利用度が高く、広範囲に亘る引用の中でこの三者が、中西氏が旅人と憶良とを評した「六朝風」^{註6}の傾向を備えていることを書き加えておきたい。

第二章で私は旅人と憶良との漢籍引用態度について次のように捉えた。

旅人―漢籍の利用によって虚構の作品を創造し、風流に遊ぶという余裕がみられる。

憶良―民衆を諷刺し、自己の切実な感情を表現する手助

この様にみていくと、旅人と憶良とは第一章でみたよう

けとして漢籍を利用するという現実的な面がみられる。

このように漢籍引用の面から旅人と憶良とを捉えたのであるが、ここで述べたのは、語句引用の面を中心としたほんの一端であつて、さらに素材・形式・文字など検討することによって、旅人・憶良と漢籍との関係も一層明らかになることであらう

△註▽

註1 「山上憶良論」次田真幸（万葉集大成所収）

註2 「日本文学史・上代」

註3 「万葉集の比較文学的研究」 中西進

註4 註3に同じ

註5 「万葉集註釈」 沢瀧久孝

註6 註3に同じ